

フランクフルトのほそ道



MUSINGS ON MY YEARS IN FRANKFURT

by Tadao Araki

THE SIMUL PRESS

T

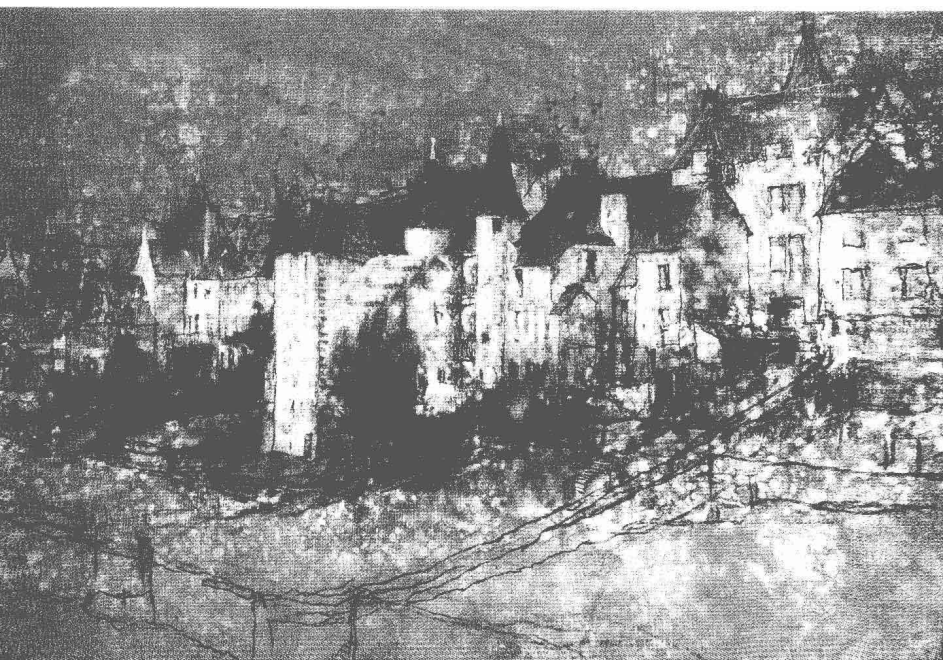
荒木忠男 著

ケルン日本文化会館館長

フランクフルトの ほろ首

美術・文学

サイマル出版会





Tadao Araki

フランクフルトのほそ道

荒木忠男著

© Tadao Araki

THE SIMUL PRESS, INC. 無断転載を禁ず

(発行所) 株式会社 サイマル出版会

編集・発行人 田村勝夫

東京都港区赤坂1-8-10 (〒107)

電話(03)3582-4221(代) / FAX(03)3582-4220

振替・東京4-52090番

印刷・製本 図書印刷株式会社

1991年8月 Printed in Japan ISBN4-377-40903-4

“ルネッサンス・マン”の随想

江國 滋

“ルネッサンス・マン”(Renaissance man)という英語の慣用句がある。

ひとことでは、レオナルド・ダ・ヴィンチのような人間のことをさして、そういう。「最後の晩餐」「モナリザ」をはじめとする不朽の名作を残したダ・ヴィンチは、絵画のみならず彫刻、建築、音楽から、天文学、医学の分野まで、その天才ぶりを発揮して、ルネッサンスの巨匠と讃えられている。行くとして可ならざるはない、そういうなんでもできてしまう達人が、すなわち“ルネッサンス・マン”というわけである。

本書の著者荒木忠男氏についての私の印象は“ルネッサンス・マン”の一語に尽きる。この印象は、フランクフルトで総領事時代の荒木さんにはじめてお目にかかったときから、駐西独特命全権公使兼ケルン日本文化会館館長になられたいまに至るまで、いささかも変わらない。変らないどころか、ボン

とケルンで再会したり、いつも恵贈にあずかる著作物や、エッセイ、紀行文、美術批評などの草稿コピーを拝読したり、荒木さんという人を深く知れば知るほど、「ルネッサンス・マン」の印象は強まるばかりである。

先年フランクフルトでお会いしたときに、同行していたドイツ生まれのアメリカ人コピーライターが「荒木さんのドイツ語は、完璧で、しかも美しい」と舌を巻いていたが、その「完璧な」ドイツ語より、もっと「完璧」なのが荒木さんのフランス語である。ほかに英語、イタリア語、ギリシャ語、スペイン語が自在で、ロシア語にも通じているという語学の才能だけを見ても、驚き以外の何物でもない。

だが、そんなものは、荒木さんの多面的な才能のほんの一部にすぎない。「ルネッサンス・マン」としての真価は、文学、美術、歴史、哲学をはじめとする芸術・学問百般にわたる深い知識と教養にある。

そのことは、本書をお読みになれば、どなたも容易に首肯しゅけんされよう。これまたほんの一例にすぎないが、「フランクフルト美術散歩」の章で、ドイツ新古典派絵画の傑作「ローマのカンパニーヤのゲート」(ティッシュバイン)を語り尽した的確精緻な論考は、「ルネッサンス・マン」の面目躍如たる一篇である。シュテューデル美術館で、私もこの絵はじっくり見た。見て、ゲートのすわり方が不自然なこと、左足が異常に長いこと、それに靴が両方とも左足用の靴に見えることには気がついたものの、ふーん、と思っただけで終わってしまった。

その晩、フランクフルトの有名な飲み屋街ザクセンハウゼンで、あの絵にまつわるエピソードを肴さかなに、地酒オクツッゲンをご馳走になった。

「左足が長すぎるという批判は、昔からあったんです。それと、左足を石の上にのせたあのポーズだ

ったら、上体を支える右肘^{ひじ}に、もっと力がこもっているはずだともいわれてきたんですね。右足にも左足用の靴をはいているという重大な点については、ゲーテの崇拜者だったティッシュバインが、画料のことで折り合いがつかなかったもんだから、腹いせに、わざと左足用の靴をはかせたのだという説が流布されたこともあるんです。でも、それは単なるゴシップで、真相は、のちに、だれかが修復をほどこしたときに、うっかり左足用の靴をはかせてしまったんです。一九七四年にヘルムート・トマシエックという美術史家が精密調査をして、そういう結論になったんです」

本書に詳述されている考証を、かいつまんで披露されたあとで、そんな重大な瑕疵^{かし}はあっても——と語を継いで荒木さんは、きっぱりいった。

「名画であることには変わりありません。だれがなんといおうと、好感の持てる絵です」

「好感の持てる絵」というひかえめな表現に、美術鑑賞のヴィルチュオーゾならではの懐^{ふところ}の深さと、ほんものの教養人ならではの謙虚さが凝結していた。

さらにいえば、上質の紀行文の魅力と、卓抜な絵画論の魅力を併せ持つ「プロバンスの明澄とセザンヌの暗黒」（第3章「欧州俳句巡礼」）と題する一篇も、余人には真似のできない「芸」になっている。サント・ヴィクトワール山に対峙したセザンヌは「自然を超える造型」イコール「人間の尊厳の維持」を「意識的・無意識的」に考えたのではないかという推論は、これまで美術史家、美術評論家のだれもが筆にできなかったことだが、理路整然、実に説得力がある。

荒木さんの「ルネッサンス・マン」ぶりを、実作に即してご紹介していたら、きりが無い。そうして、ここが肝心のところなんだけれど、私が荒木さんを尊敬しているのは、荒木さんが「ルネッサンス・マン」だからではない。だって、そうではないか。レオナルド・ダ・ヴィンチをはじめとする古今の大天才は、持って生まれた天賦の才能のおかげで、放^{はな}つといたって「ルネッサンス・マン」にな

った人物ばかりである。

荒木忠男は、ちがう。

秀才であつたかもしれないが、天才ではない。にもかかわらず「ルネッサンス・マン」になり得た。なぜか――

その秘密を、私は、荒木さんの新稿『ケルン・ボン句帖』（未公開）で発見して、しびれた。

百年に一度といわれる東欧の激変と、それに引き続くドイツ統一、さらに超大国ソ連の内政危機と湾岸戦争の同時発生という信じられない国際情勢下でも、荒木さんの日常生活のパターンは不変だった。外交官としての国際的目くぼりが最優先事項であることはいうまでもないが、それをすべて消化した上で、荒木さんの日常は、ざっとこんなぐあいである。

「（外交官として）独・仏・英・米・オーストリアのテレビ番組（二十のチャンネルが入る）と、定期購読紙（ル・モンド、NZZ、ヘラルド・トリビューンほか）で、国際情勢を克明にフォローするのは当然の業務だが、それだけではくやしいので、毎朝、払暁（あつめよう）に起きて、まず聖書の一節を、フランス語、ギリシャ語、ラテン語、イタリア語、ロシア語の順で大学ノートに書き込み（約二十分を要する）、チェーホフの名作を十行ほどフランス語に翻訳し（一時間はかかる）、『ヘブライ語入門』で勉強したあと、九時半に迎えにくる公用車で、ケルンの日本文化会館に出勤するのだが、約四十分間の車中で、時事問題を掘り下げたドイツ、フランス、イギリスから出ている新刊書を読む。公務を了えて帰宅したあとは、七巻本の『英国史』（“Cassell's History of England” 一九〇年刊）と、ドナルド・プリーターの“Ein klingendes Glas. Das Leben Rainer Maria Rilkes”（一九八七年刊の独訳本）と、フランス・アンブリエールの二巻本“Le Siècle des Valmore”（一九八七年刊）を、平行してすこしずつ読む」

要約すれば、これが荒木さんの平均的な一日の勉強ぶりである。その合い間を縫って、エッセイ、評論を執筆し、俳誌『馬酔木』と『きたごち』への投句を中心に俳人としての活動も旺盛というのだから、あの小柄なからだの、いったいどこにそれだけのエネルギーを貯えているのか、と思う。

勉強の姿勢について、荒木さんはこうも記している。

「右の『英国史』など、一冊が六百ページもある古本で、約二年前から読みつづけ、まだ第一巻の半分くらいしか行かないが、それでも構わない。人生が短いといって、あわてる必要はすこしもない。五十八歳の手習いで始めたヘブライ語がものにならなくても構わない。要は、仕事の合間にすこしずつ学び進んで行く「鈍」と「根」との人生態度にあるのであって、成果は自らに問わない」

この真摯な努力の堆積が、荒木さんの人格を形成している。「ルネッサンス・マン」は、けだし、一日にして成らず、である。

(随筆家)

総領事公邸の台所で——まえがき

サイマル出版会の田村勝夫社長の常に変らぬ激励とご好意により、ここに上梓の運びとなった『フランクフルトのほそ道』は、昭和六一（一九八六）年三月に同出版会から世に問われた『デュッセルドルフのほそ道』の続篇である。

私は、外交官として、昭和五九年七月、外務省に新設された文化交流部の初代部長に就任したが、一年半の激務のち病に倒れ、その後昭和六一年八月より平成二年五月末までの三年九カ月、西独フランクフルトの日本国総領事として働いた。同年六月より駐西独特命全権公使としてボンに転勤し、兼ねてケルン日本文化会館（国際交流基金の海外拠点のひとつ）の館長を務めることとなった。

こうした人生の曲り角に立って、フランクフルトでの海外勤務を振り返ってみると、確かに忙しいポストではあったが、家族一同と幾多の先輩、友人、後輩に支えられ、また個人的には所属する二つ

の俳句結社——「馬酔木^{あしび}」と「きたごち」——とフランクフルト日本語福音教会に勇気づけられ、かろうじて心身の健康を取り戻し、戦後のわが国文化交流史でも画期的な「ブック・フェア——日本年」の準備に参画し、日本人学校の校舎を新築し、折からの東西ドイツ統一の激動をその場で観察することもできて、まことに幸福な人生の一時期となった。

家内が言うには、「これで結婚以来、何と一〇回目の引越し」だそうだが、転勤のために身邊の荷物を片づけていると、フランクフルトの春夏秋冬を通じて、公務の合間に総領事公邸の台所で書き下ろした拙文がだいぶある。公邸は広くて立派だが、原稿用紙、インク壺、辞書に参考文献に灰皿など、客間のテーブルの上に散らかしておくわけにもいかず、それにドイツの家はだいたい電灯が暗いので、その電灯がいちばん明るく、また来客が入ってこない台所の机で書くしかない。そこで、あるとき、「秋」と題して、次のような詩らしきものを書いた。

秋

俺の書斎は台所

そこがいちばん灯^ひが強い

窓にひととマロニエが

咲きつ散りつつ友となる

いま秋の日の日暮れとて

芽吹き朝の光りなく

風しようしようと枝を揺り

残る黄葉も細まりぬ

俺の書齋は台所

そこがいちばん灯が強い
昔生きてた人達の

詩など訳して夜は更ける

秋来りなば冬近く

冬は北風鳴るべきを

何をいまさら想うてか

俺の心もときに泣く

ああ秋が来て葉が落ちて

過ぎにし時の帰るなし

冬来りなば春ありと

詠みたるひとも墓の下

乾坤夏冬とどまらず

城址いくたび木の葉落つ

書く者だけが残る世の

底の底まで見極めた

やがて風吹き雪も降り

春まためぐり芽生えては

夏の暑さを耐え忍び

ものみな実る秋となる

ああ晩秋よ響きよし

五十余歳の傷つける

歲月如何に美しきかな

ただ随感の筆を染む

俺の書齋は台所

この詩は、七五調で調子がよくて、一読すると、まるで酒に酔っぱらって書いたように響くかも知れないが、著者は空に暗雲がたれこめ、木枯しが吹きすさぶドイツ晩秋の一夜、この詩を自らの人生観として、本気で、真面目に書いたのである。そして、『フランクフルトのはそ道——美術・文学随想』一卷ができ上がった真実の理由は、この詩に尽きている。

それに、この夜、すなわち昭和六三年の一月二〇日の夜に、著者は右の「秋」のほかにもう二つ「詩らしきもの」を書いた。一つは磔の酷刑にあわれ給うたイエス・キリストを歌う「釘の音」であり、オペラ歌手のⅠ夫人が豊中市在住の気鋭の作曲家千秋次郎氏に紹介してくださり、同氏はこれを讚美歌として作曲された。有難いことである。同じ夜に書かれた三つの詩は、主題こそ異なれ、同じ人生観にもとづくものなのである。

釘の音

イエス架上に血と汗と
滴りたまい裏切らず

釘うつ音の絶えてなお
父に咄く祈りのみ

天蓋割れて稲妻と

雨と風との起こるには

いまだ時ある磔の

過ぎてもある釘の音

高弟いつか影も無く

伏し泣く母とマダグラの

肩のみ震え荒涼と

丘に風ある救いの日

フーガの楽が^{もまた}百度も

繰りかえされて説くごとく

幾世紀へて鳴り^や熄まぬ

復活まえの釘の音

もつとも、次の、同じ夜に作つた第三の詩は「月夜」と題して、子供時分によく歌つた童謡「月の砂漠」を念頭に、ちょうどそのころ結婚した部下のS君の将来が幸多かれと禱^{いのち}つて歌っている。外交官の生活は、表面的な華やかさとは裏腹に、生涯の大部分を異郷に転々と暮し、それに伴う子供の教育問題があり、万事気を使う激務であるから、新婚の若い二人がどんなに苦勞をしても節操を貫くようにと、また私自身の過去を振り返って、それが、つまり人間として節操を貫くことが結局は一番よいのだとの信念を、大人のための童謡にしたつもりである。

月 夜

駱駝^{らくだ}の瘤^{こぶ}にホーレホレ

月は砂漠の斜めはし

鞍の小鈴が鳴るままに

サクサクサクと砂の音

寄り添う二人ただ寒く

しっかと抱いて顔見えぬ

これが砂漠か北風の

月夜は夢で見たような

何処^{どこ}かの国に川流れ

岸はみどりに赤い屋根

芹摘む指のしなやかに
もつれる夫婦あるものを

それでも瘤にホーレホレ

駱駝に揺れて行きましよう

辛く悲しい世界でも

ふたり生きてる月の夜

つまり、在フランクフルト日本国総領事公邸の台所で生まれた拙詩三篇は、それなりに、公務多端の折から人間は文章を書かなければ生きてゐる証しがないという著者の、もしかしたら狭量な人生観を盛る「秋」、イエスの犠牲が人間に救いをもたらしたとする宗教観に基づく「釘の音」、そして、家庭生活でいちばん大切なものは愛という考えを詠った「月夜」によって、この本『フランクフルトのほそ道』の基調を形づくっている。

まえがきを「総領事公邸の台所で」とした所以である。

サイマル出版会スタッフの方々に深甚の感謝の意を表しつつ筆を擱く。

(一九九一年七月)

荒木 忠男

目次

フランクフルトのほそ道

“ルネッサンス・マン”の随想——江國滋
総領事公邸の台所で——まえがき

主よ、いずこに行き給う——プロローグ……………1

I 俳句の喜び

1 句心句友……………15

2 森ゆけば雲がキスする夏の雨……………24

3 ドイツの俳句熱……………28

4 海外吟の季語……………33

5 ヨーロッパ連作俳句……………37

6 「馬酔木」入選作……………44

7 「きたごち」入選作……………48

II フランクルト美術散歩